



海濱記

卷一

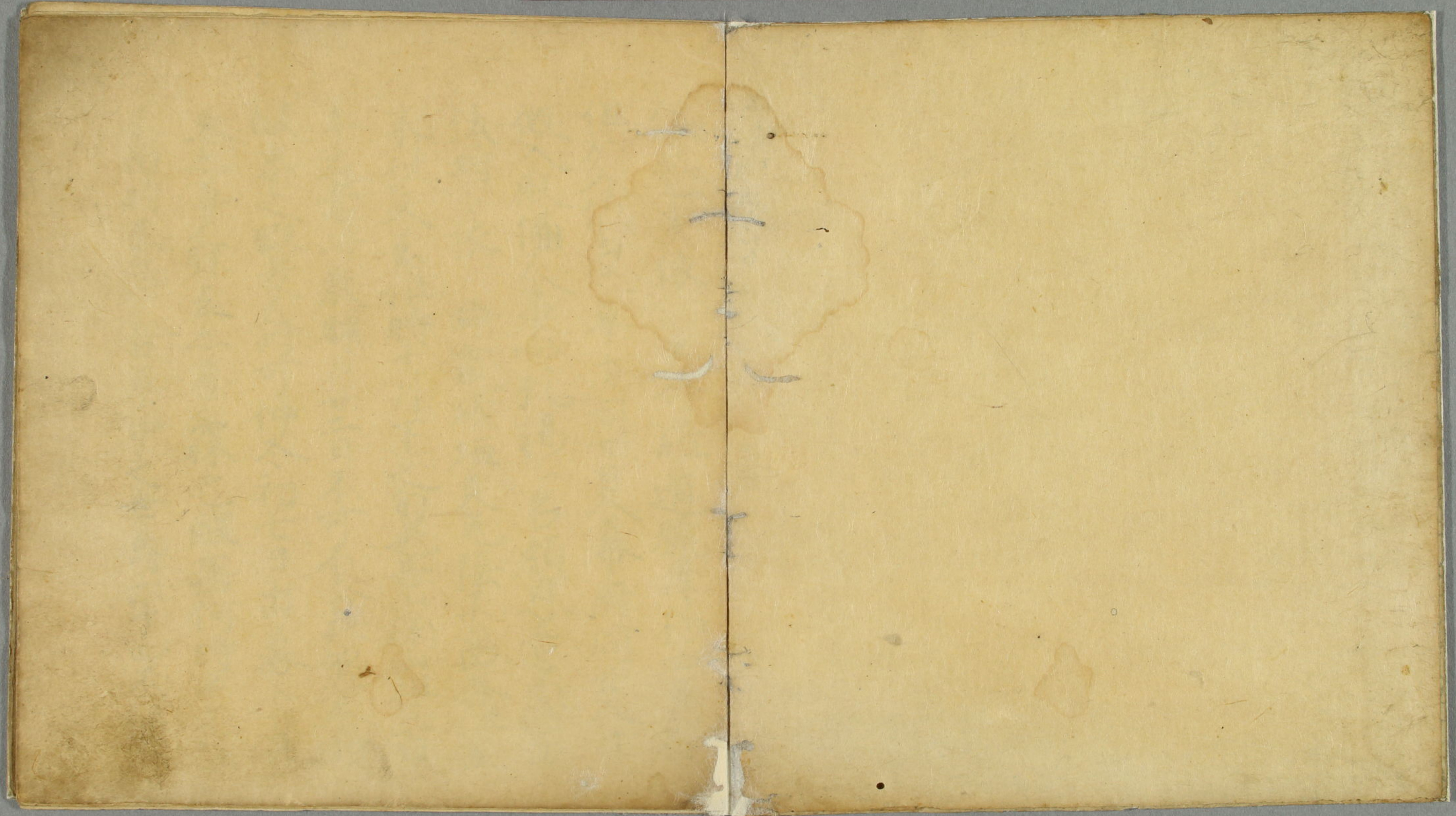
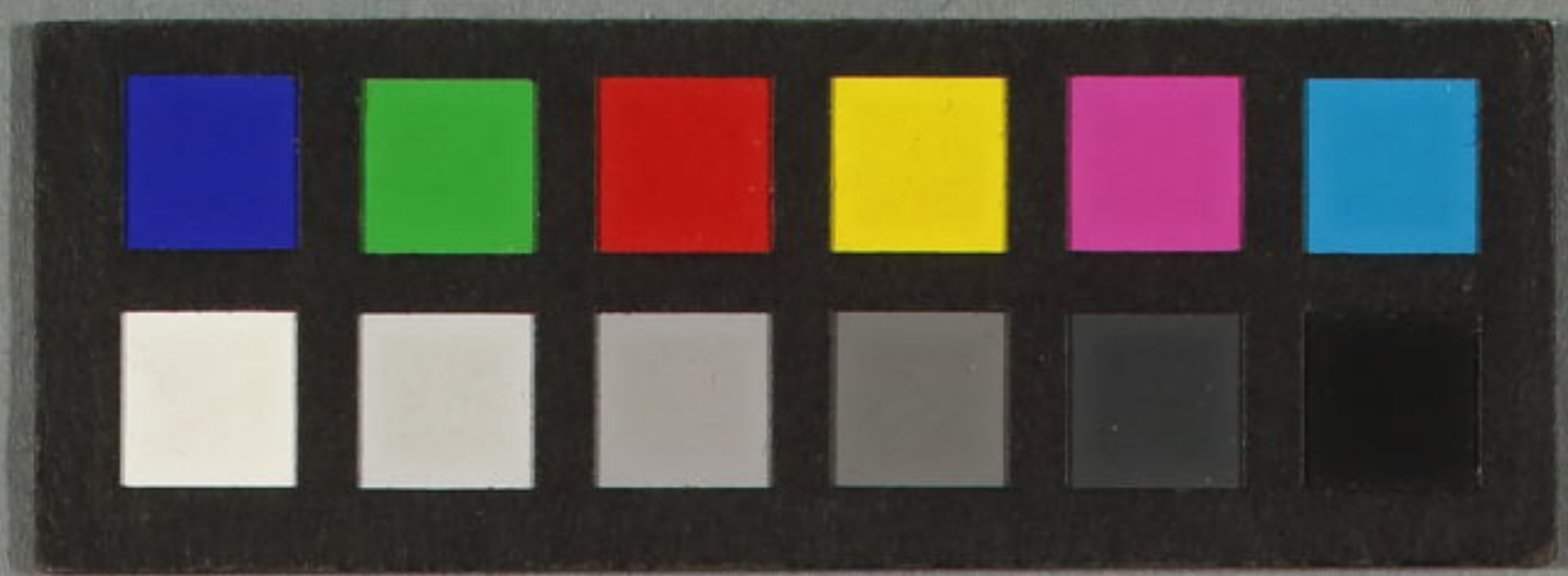
和歌部
第三七〇号
全部
巻冊

特別

八四

8068





往歲_レ亥依 名命雜道臘月初四日起
 但列人仇_レ之草庐同廿日入幕府同廿八日
 徵入殿備人事以礼謁 名願恩意不淺而
 後時_レ依 命窺城垣矣光陰不留春往夏
 来秋又去惟時十月下之旬也吾出用山祖三百
 年忌當此歲臘月廿二日不可不香拜依此奉請
 皈京之暇蒙許可仲冬初七日出幕府矣
 未_レ之夢寐去_レ之夢寐也醒寤何時乎光陰
 不啻時不待人吾夢中之世壽六十四不得半

日雨東漂西泊而身已老矣吁是誰過平
世上光陰下坂車 歲云暮矣欲歸家
士牽白雪看無飽 又思長卷一日花

過吳川

橋之吳川倚旅亭 玄音携酒好叮嚀
又相別去向前路 我此生涯水上萍
舟行如夢如雲 子之歸兮日之夕兮
肩之負兮心之憂兮 嗚呼

六之乃之

乃境之

乃境之

乃境之

乃境之

るまゝに我ハキのこわらぬ
雨の君をよめて入る計し君雨止
とさうねも言枕と志す君は
しりあやとていし

浪くも思ふやかのそ遠くを
花さくしられ有はの寺

此言大破のやうにほいけ黒に
虎石とてしりし一れお石と
て今もわていし

こゝ残ふしりしをさそせりふり
しれ矢しきし大破を鹿

こゝらさの破はけはすとて
世中をいじりしとみと浪はけ
小糸色より出らるまの破

九日小田をくしりやとて
残男の泣きししれ小田を
らうしけし人れとていし
そとていしをわて宿屋

出小田原上葛根山路僥羊腸崎嶇之難
三十里漸修湖水見之思之妙高峯頂行
舟之何難五入寺則主山儼安山之暮鐘
應空各樓觀列波心親覺身到龍宮城
山隈有新村行以卸角馱入座則湖水湛
前士峯澄新寔世外之壯觀也

遠到管根山轉重 十年古寺暮樓鐘

影沉湖水有奇觀 樵父桑母上士峯

土行ちりぬ管根の海乃水々あり

ふとらけし人富士やまのん

十日午時入三嶋先參詣於明神奉社
末社新造華美不可勝言矣

南云三嶋大明神 本地大通佛變身

蓬丈瀛洲是當處 不超弱水得仙真

浮嶋原

行處是皆浮嶋原 此生如寄不留痕
雖截身尚未截影 歸去來兮三月村

あふとらけてははるあつては

志すくちる母をくもく泣かす
乃ほつたの海をく松の志をあり
くはきく張河の志をく松原と
て多く此人を白舟にわて取ると
ひくく人やらけをく人けん
くく子あくく志をく松く

志吹上

客路風を吹上松 惟時天舒在三冬

夕陽杖各浦各 教杵れ敲海寺鐘

世くくくく以上此松の名くくや
木くくくくくくくくくくくく凡

多子浦

焦思塩電籠空相 世路艱難最耐憐

似愛風光多子巻 擔頭湖汲月明還

きく子れあきくくくく烟凡をい

きくくゆく空くくくくくく

清見用

不鎮用空更生 只能令勝境面行

暮雲埋景有遺痕 清見寺中鐘一杵
人やきれとてしるしめりし清みさ
海乃ちこころや浪乃せき寺

三保

三保松原緑搦波 江東絶勝不尋他

客中風景未ち飽 強策羸驥信物也

春をわしれふらぬわさく富貴は
志がやくふありあまの釣舟

十二日此初に廣州宿をいづれば

大府中とてしるしめりし清みさ

とすしるしめりし清みさ

き皮水多や鴨履をわはせしや

葛袴はをわはせしや

清の心よかれ

いほはとそ世は石れ火をうけいふ

ひらりぬまきこころをわはせしや

旅人いふこころをわはせしや

こころをわはせしや

くおれ大井川をわかれ

水を倒とわがしるはは大井川

人のあつられをいひまゝ

十三日ころ女の着をいへる

よきそとくしるはは中

かたもよしとわがしるはは

おちもよしとわがしるはは

まてとよしとわがしるはは

中ふよしとわがしるはは

ふしとわがしるはは

まをなみ人いふをいひて

まいあけやあまの事

年いけて又いふたて

と又いふたて

あまの事いふたて

いふたていふたて

かけ川

いふたていふたて

とくろり神くかきま川乃波
凡あろいしうまじくありふ
ふ富士を思付れふとんそ
布とんそすれ物を三冬さ
ろろろろろろろろろろ

富士山高在大倭 中朝五嶽必何
峯比東海所何似 只見漁翁雪一蓑

去歲見富士作今記于此

直宙旬岩落齋 千秋積雪擁東廂

月明夜羨星氣 富士峯前不見山

十曾と濱松此宿をい川

さそ若もとくそまれしな川浪
木末くそくそゆまののよと

あそ井のほしてまそれ海へのそ

まそ下乃ねしそまそぞんれ

若くそけて川そつらぬ

垣見坂をよぶつそ

くはらうてそまそや海とそめめ

月しけりてさしきりてさしきりて
坂といはれはつゆ道なきにありしは
ついでして人の平きうもなほとて
ふれり流しはあはれなりて人平にて
海を見おろすはを坂のなほとて
思ふねきとてさしきりてさしきりて
杜若と名をわらふは色もゆき道
ふの葉をとらて三川と名を杜若
花もさあらし根をいれわら

やしきりてさしきりてさしきりて
その時をわらてさしきりてさしきりて
きそ三川のほとりふすうとてさし
し田くくつありてさしきりてさし
と真せしきりてさしきりてさし
わら何とてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりて
世をさしきりてさしきりてさし
難波のさしきりてさしきりて

ありし里の若れ必位をうてれはほそ
志いそりうして世にいれおん
中や希坂よりうらむもたらん
見しれぬまの朝をい
白妙乃ちうらにまぬ希坂
若しとて花のほしき
思崎とてわらわし
津袋多しとてはせ
何とてその茶丸の

池の難辨とて里れ名のち
ふとん

水底れうらくとては
あやうらとて池乃難辨
うらとてはけて
さしのみうらとては
ちうらとて人やれをい
あけした友を思へ
友とてはいそあけのま

とてしつゝ花月の入海

幸右に城にもメハ幕府におつと

うらゝ家郎に伝承つては記ふこと

三首に舟ぬる為ちつゝまぬかす

と七里ぬらや

過熱田前初月ぎ 三更雨進不心安

往帆逢速風消息 渡是巖陵七里灘

十六日の東羽しゝ乗右にけは後を

たてて人ごもあはの跡をたぬか

にらしわくつなをくして

東へいそめはつそちのよらとを

うきくさるゝかくおれやいら

きをせりゝゝつて出日市は

宿に一夜をあつたやうな

くねらゝ十たか

うらゝゆゑに伊勢や尾法のうらゝと

あつあけてもゝうらの跡は

心すゝ宿あり右に尾法をさう

寺に堂ありとて石茶師といふ文字をくわして

とハめよりいひやくのむかひに
ふやれむらの教はたし

下興 拜石茶師

拜石茶師製立 應供方土木當東

露合虚碧瑠璃色 同出舟途鑑鑿中

左跡をへて龜のの行り

人をあそそ龜の上たれしりか

朽を老翁ぬもをくわして

拜用之地蔵

崩之地蔵大世深 酒肆魚房錫杖音

誰見之天輪月 清光昨夜立蹄浴

宿坂下詣鈴康師あり

鈴康明神古地深 靈灯一巨月懸岑

聽消業障尽煩惱 溪水山風神樂音

十日くわい川

朽乃凡水のひもをくわして

ていつちきまはるもつたて

名をたけなはるいおらうとて

けさしと我ふまうとて名をた

ふやとねと神くいぬと

むらさきと水口とてまじり

つて我をそとていけて

行先おれまうとて骨をた

強れまうとの名めまうや

よと田んぼをそとて

久しうれおるゆゑとて田ん

ぼれをそとて骨をた

ありて流るをそとて

えと又まうとておらうと

まうれおる世の名えと

草津といふとて

まうれおる人といふとて

おとまはるもあはる

十九日昼飯ありて

廿日宿をいけ

しんしんきんらんその浪湖のさみ
又ろろあらんかかれはれ

開り入とそ

山科の春をきこむしめあつ音ハ
きりきりもあれ開しりえん

栗田山をわらわらめてらやま
文々しりりて

栗田山やまはいてほのくそ

ろやどくふち入るれしり

廿日のしりれ紫跡の四角
入ぬ





